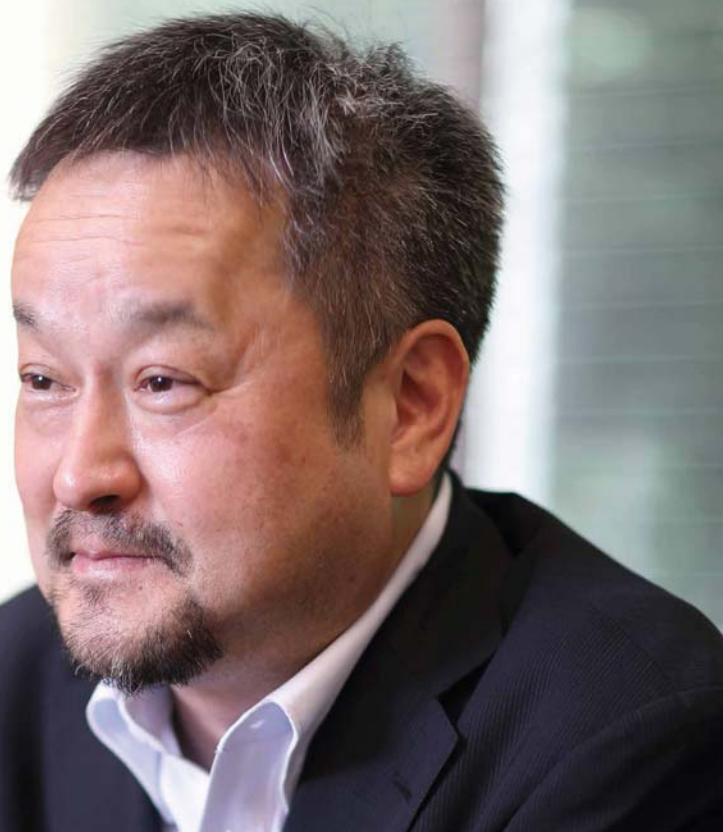


立ち読み版



東京大学 社会科学研究所 所長 教授

げんだ ゆうじ

玄田 有史 さん

1964年、島根県生まれ。ハーバード大学客員研究員、オックスフォード大学客員研究員、学習院大学教授を経て、2002年より東京大学助教授、2007年より同大社会科学研究所教授。労働経済学を専門に、『仕事のなかの曖昧な不安—揺れる若年の現在』(中央公論新社)、『ニート—フリーターでもなく失業者でもなく』(共著、幻冬舎)、『14歳からの仕事道』(理論社)、『希望のつくり方』(岩波新書) など著書多数。2021年4月より東京大学社会科学研究所所長。

【写真】安岡 嘉

## 労働経済学の第一人者が語る これからの「希望」と「ブリコラージュ」

【取材・文】原 正紀

株式会社クオリティ・オブ・ライフ代表取締役、株式会社スマートバリュー（東証一部上場）社外取締役、キャリアコンサルタント協議会常務理事・事務局長、高知大学客員教授・経営協議会委員、成城大学非常勤講師、中小企業診断士。早稲田大学卒業後、株式会社リクルートを経て起業し、人材ソーシャルビジネスを展開。著書『定年後の仕事は40代で決めなさい』(徳間書店)、『インタビューの教科書』(同友館) など多数。

HARA'S  
BEFORE

玄田さんは、ニートやSNEP（孤立無業者）などの課題を抱える存在をつかみ、いち早く警鐘を鳴らしてきた。「希望学」の研究についてもリーダーとして牽引し、東日本大震災の被災地でもある釜石市での地域調査など、雇用政策に多大な影響を与えてきた。

日本を代表する労働経済分野の研究者から存分に話を聞いてみたい。



Umano! — Yuji Genda

### 挫折した人ほど希望に向かう

原：先生には「若者自立挑戦プラン」政策実施時に、若者支援のジョブカフェ事業で大変お世話になりました。まずは、これまでの研究について教えてください。

玄田：仕事に順風満帆で進んでいる人よりは、仕事にうまく就くことができない若い人などを中心に考えてきました。つまづきや挫折を経験してきた人が、どうやって仕事や人生を紡いでいくのかを明らかにしたうえで、多少なりとも役に立てればいいと考えています。

『ニート』という本を書いた時に、希望のなさを感じました。ニートというと、「やる気のなさ」、「能力が欠けている」という話がしばしばあったのですが、実際に研究してみると、彼らに欠けているものがあるとすれば、それは希望ではないかと思えました。ニートに限らずフリーターの若者などの、しんどさや苦しさの一つは希望が持てないということだと思います。希望とはどうやって紡いでいくのかを考えなければ、労働経済学でも本当に大切なものは見つからないのではないか。そこから希望というものを考える「希望学」を始めたのです。

原：希望学は、世界を見渡しても類似の研究はあまりないと聞きます。

玄田：幸福の研究というのはありますが、希望の研究はあまりないですね。希望をもって行動する人の特徴を調べてみると、挫折の経験をした方ほど、その後は希望に向かって進んでいると感じました。「人生を振り返ると、挫折とかつらいことがあったけれど、今思えば、いい経験だった」という話をよく聞きます。苦しい状況から何とか変えていこうとする、そのこと自体が希望という感じですね。

水俣病が深刻な社会問題になった時や、阪神・淡路大震災や東日本大震災など、その経験自体は大変過酷で苦しいものなのですが、「それでも人が生きていく時に希望は失わない」、「そんな状況だからこそ、もっと良い明日にしたい」など、今の苦しみを和らげたい時に出てくる言葉